

第15回名古屋大学博物館企画展記録 伊吹おろしの若者たち—八高創立百年の歴史から—

Record of 15th NUM Special Display
“History of the 8th High School, an antecedent of Nagoya University”

堀田慎一郎 (HOTTA Shin'ichiro)¹⁾・山口拓史 (YAMAGUCHI Takuji)¹⁾・
羽賀祥二 (HAGA Shoji)^{1) 2)}・西川輝昭 (NISHIKAWA Teruaki)³⁾

1) 名古屋大学大学文書資料室

Nagoya University Archives, Nagoya University, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

2) 名古屋大学大学院文学研究科

Graduate School of Literature, Nagoya University, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

3) 名古屋大学博物館

The Nagoya University Museum, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

場所：名古屋大学博物館（古川記念館）

会期：2008年10月7日から11月8日

主催：名古屋大学博物館・名古屋大学大学文書資料室

本記録は、第15回名古屋大学博物館企画展の展示内容を忠実に記録したものである。筆者による注記はかぎっこでしめす。本企画展の入場者数は2,187名であった。会場では、展示図録『旧制第八高等学校—伊吹おろしの若者たち—』と山口拓史著『第八高等学校—新制名古屋大学の包括学校①—』（名大史ブックレット12、名古屋大学大学文書資料室刊）が無料配布された。企画展実施に当たりご協力いただいた、名古屋大学大学院文学研究科学生の浅野伸一、李 主先、中村史信、加藤沙波、木村慎平の各氏に謝意を表する。

展示にあたって

本年は、本学旧教養部の前身であり、その教養教育の源流でもある旧制第八高等学校（八高）が創立されて100周年にあたります。今回はこれを記念し、また本学創立70周年記念事業の一つとして、八高がたどった歴史を、学生生活に焦点をあててふりかえります。

本学では、大学文書資料室と博物館を中心に、八高の歴史にかかわる多くの資料を所蔵しています。とくに大学文書資料室では、3年前ほど前から、八高会（八高の同窓会）を通じて卒業生の方々から600点近い資料の寄贈をうけました。本学所蔵のこれらのコレクションは、名大の歴史だけではなく、日本の高等教育史を語るきわめて貴重な資料群になっています。本企画展の展示は、それらの資料のからとくに厳選したものです。さらに、名古屋市博物館のご協力をえて、同館所蔵の貴重な資料も展示されています。

「伊吹おろしの若者たち」は何を学び、何を悩み、どのような青春をおくったのでしょうか。最近、そのあり方が問われている、大学の教養教育を考えるきっかけにもなれば幸いです。

なお、本企画展は、八高会のご寄付および本学総長裁量経費の支援を得ました。記して謝意を表します。

2008 年 10 月

名古屋大学 博物館／大学文書資料室

パネル展示

1. 旧制第八高等学校—その歴史と瑞穂キャンパス—

八高は、創立から廃止まで、どのような歴史をたどったのでしょうか。

八高は、1908（明治 41）年、愛知県による誘致運動のすえ、全国 8 番目の官（国）立高等学校として創立されました。そのキャンパスは、愛知郡呼続町大字瑞穂（現在の名古屋市瑞穂区瑞穂町）に置かれ、瑞穂ヶ丘に位置していたことから「瑞陵」とも呼ばれました。ナンバースクールの高い格式とともに、「勤勉八高」、「教練八高」、「スポーツ八高」などで知られる校風をほこりました。

しかし、1945（昭和 20）年、空襲で校舎のほとんどを焼失し、翌年には知多郡河和町（現美浜町）への移転をよぎなくされました。その直後から復興運動が盛り上がり、47 年には旧キャンパスへの復帰をはたしましたが、新学制への移行にともない、50 年にはその 42 年の歴史の幕をとじました。

- ・旧制高校と八高の創立（図 2）
- ・八高キャンパス—瑞陵（図 3）
- ・空襲による焼失と復興（図 4）
- ・八高の終えん（図 5）
- ・その後の瑞穂キャンパス（図 6）

2. 八高の教育—エリートの養成をめざす—

八高では、どのような教育がおこなわれていたのでしょうか。

戦前の旧制高校は、現在の大衆化された大学や高校とはことなり、ごく限られた男子しか入学できませんでした。とくに八高は、卒業生のほとんどが帝国大学に進学する、エリート校だったのです。それだけに入学試験も難しく、日本有数の難関校でした。

その教育は、入学時から進学希望学部ごとにクラス分けされ、語学を中心とした高水準のカリキュラムが組まれていました。これらの科目を、多くのすぐれた教官によってじっくりとゆとりをもって学ぶことができたといわれています。

授業への出席率もかなり高く、「勤勉八高」の異名をとりました。また軍事教練を重視し、これを心身の鍛錬の場と位置づけました。「教練八高」のゆえんです。



図 1 展示風景

- ・入学試験（図 7）
- ・勤勉八高（図 8）
- ・教練八高（図 9）
- ・八高の外国人教師（図 10）
- ・雄飛した卒業生たち（図 11）

3. 学園生活—伊吹おろしの若者たち—

八高生たちは、どのようなキャンパスライフをおくっていたのでしょうか。

八高キャンパスには学生寮が建てられ、1年生のほとんどが入寮していました。八高生たちにとって、キャンパスは講義をうけるだけの場ではなく、学生生活そのものだったのです。

寮では学生による自治が認められ、自由でバンカラな雰囲気の中で青春を謳歌し、友情を育てることができたといわれています。そうした寮生活の象徴であったのが、毎年のように学生たちの手で作られた寮歌であり、その1つである「伊吹おろし（伊吹風）」は、八高寮歌の代名詞にもなっています。

また、八高は体育会の活動もたいへんさかんでした。東海地方はもとより、全国の大会でも優秀な成績を残し、「スポーツ八高」とも呼ばれて文武両道をほこりました。

- ・寮生活—その1（図 12）
- ・寮生活—その2（図 13）
- ・寮歌「伊吹おろし」（図 14）
- ・ストームとデカンショ（図 15）
- ・記念祭（学園祭）（図 16）
- ・スポーツ八高（図 17）
- ・四高戦と応援団（図 18）
- ・八高生と政治（図 19）

4. 戦時下の八高—戦争と統制のなかで—

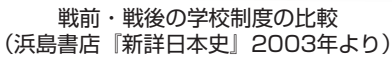
戦時体制によって、八高生たちの学園生活はどのように変わったのでしょうか。

1931（昭和6）年の満州事変をきっかけに、日本国内から次第に自由が失われていきましたが、八高も例外ではありませんでした。やがて八高生も労働力として動員されるようになり、ついには学徒出陣として戦場におもむくようになったのです。政府の命令により、在学期間も短縮されました。

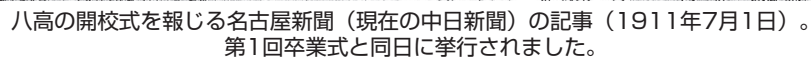
しかし、八高の学生文化がすぐに失われたわけではありません。記念祭やデカンショ、全寮コンパ、クラス対抗駅伝などは、アジア・太平洋戦争で日本が敗勢になるまでおこなわれていました。そして敗戦後、八高生たちの手によってすぐに復活しましたが、占領下の民主化に対応する新しい様子も見られました。

- ・戦時下の学生群像—その1（図 20）
- ・戦時下の学生群像—その2（図 21）
- ・奪われる自由（図 22）
- ・八高生の出陣（図 23）
- ・焦土から復活する八高文化（図 24）
- ・郁達夫と八高—中国人文学者の青春（図 25）

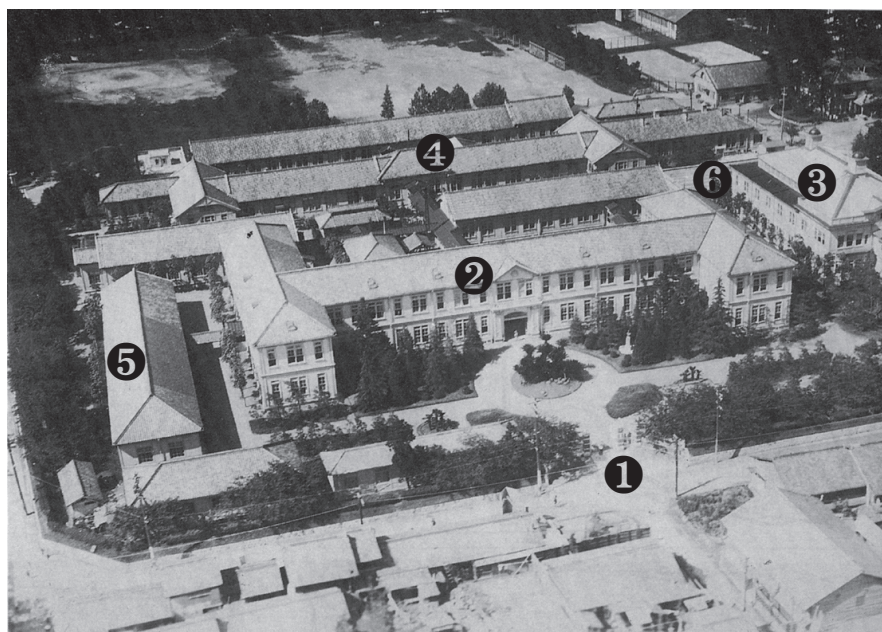
旧制高校と八高の創立



八高略年表



八高キャンパス—瑞陵



瑞陵キャンパス全景（昭和初年頃）

①正門 ②本館 ③講堂 ④教室・実験室 ⑤図画教室／鉱物・地質教室 ⑥貯水池兼プール



八高の正門



現在、博物館明治村（愛知県犬山市）の正門として利用されています。



本館前にあったソテツ



現在のソテツ（名古屋市立大学・山の畑キャンパス）

空襲で黒こげになりましたが蘇生し、1978年に現在の場所に移植されました。



図3 パネル「八高キャンパス—瑞陵」

空襲による焼失と復興



1945年3月の名古屋空襲後の八高正門付近



復興祭記念式典（1947年9月）

戦災で校舎を焼失した八高は、1946年9月に旧海軍航空隊跡地（知多郡河和町）へと移転しました。航空隊建物の迷彩がそのままになっています。

敗戦後、瑞穂キャンパスに校舎を復興しようという運動が、八高の教師・学生から湧き起こりました。同窓会や地元瑞穂区の「復帰支援後援会」をはじめとする多くの人々、愛知県・名古屋市から支援を受け復興が実現しましたが、物資不足のため河和町の校舎を瑞穂キャンパスに移築しました。



河和キャンパス

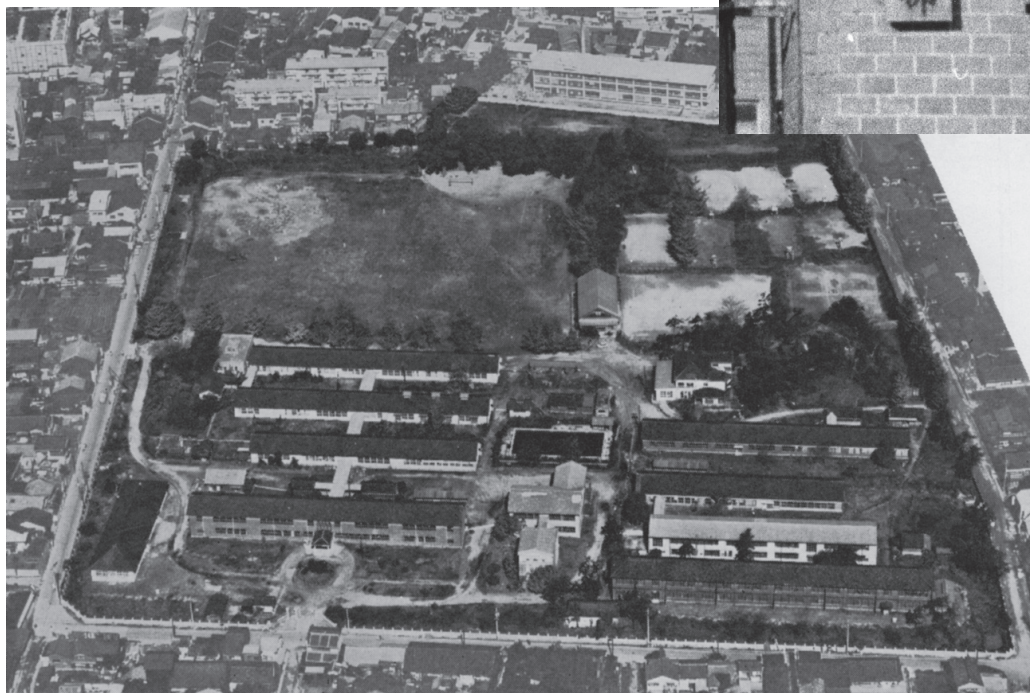


図4 パネル「空襲による焼失と復興」

その後の瑞陵キャンパス



名古屋大学旧教養部正門

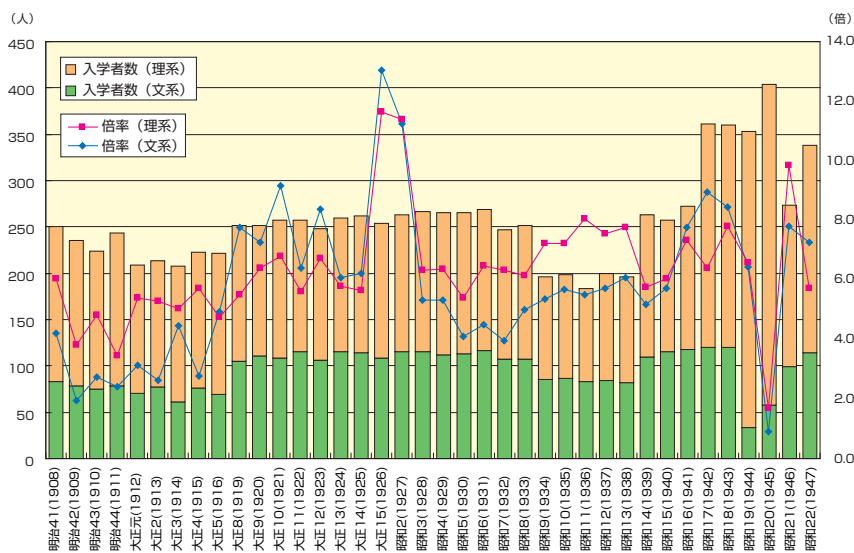


東山キャンパスに移転する直前の名古屋大学教養部のキャンパス全景。
1964年移転が完了し、現在は名古屋市立大学山の畑キャンパスとして利用されています。



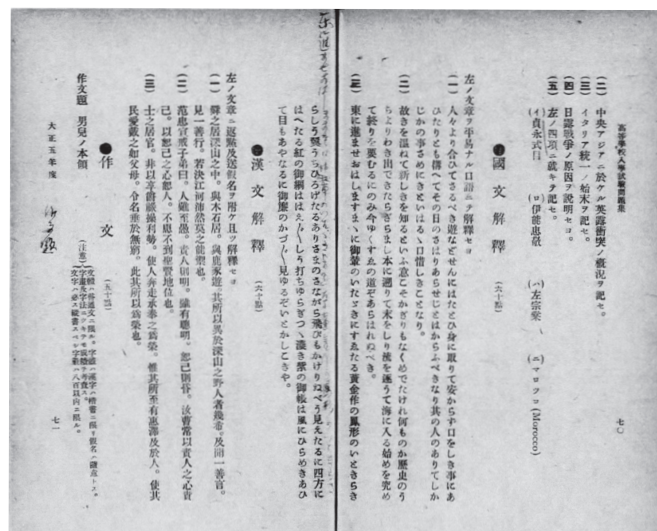
図6 パネル「その後の瑞穂キャンパス」

入学試験



八高の入学者数と入試倍率

全体として上昇傾向にありましたが、1926、1927年度の倍率が飛びぬけて高いのは、2つの学校を受験できる制度であったためです。



八高の入試問題の一部（1916年度）

このほか、英文解釈、和文英訳、書取（ヒアリング）、代数、平面幾何、三角法、化学、歴史、書取（漢字）がありました。



図7 パネル「入学試験」

勤勉八高



授業風景（図学）



授業風景（化学実験、1935年頃）



図書閲覧室



夜中の試験勉強
(1940～41年頃)



図8 パネル「勤勉八高」

教練八高



初代校長の大島義常よしなが（在任1908～1918）

軍事教練と現役将校らによる検閲講評は、開校当初から全国の高等学校に先駆けて実施されました。

「教練八高」との異名を生んだこの軍事教練は、大島初代校長の創意によるものとされています。



秋季大演習で名古屋郊外の本地ヶ原へ行軍する
八高部隊（1934年）



戦闘演習（1915年）



図9 パネル「教練八高」

八高の外国人教師



八高の全教職員（1921年）。右端に外国人教師の姿が見える。



L.H.ハミッチュ

ドイツ語教師として来日し、八高の教壇に立ちました。日本文化に強い関心を持ち、江戸時代の思想史などが研究テーマであったといわれています。

担当	氏名	出身国	在職期間	備考
英語	ビー・ゼー・ウルデンハート	英	明42～大3.4	マスター・オブ・アーツ
独 語 羅 旬 語	アルノルド・ハーン	独	明42～大9.3	ドイツ・ソフィア・エリート チム・リベリウム・ワグネル 羅旬語は明43～44、 大5～7
独	エルンスト・ヘルマン・ヘルブリッヂ	独	明43～大2 大3～大13	
英語	グラハム・デー・シー・マーター	英	大3～大3.12	
英語	ハーベイ・デー・リーランド	米	大4～大5.7	
英語	エルドン・グリッフィン	英	大5～大8.9	バチェラー・オブ・アーツ
英語	ヘンリー・コウルター	英	大8～大9.12	
英語	カスパー・クーパー・ロビンソン	英	大10～大15.3 昭2～昭5 昭6～昭10	
体操	ウィリアム・アール・パークヒル	米	大12.8～大14.8	バチェラー・オブ・フィジカルエ デュケーション
英語	ヴィクター・チャールズ・スベンサ	英	大15～昭2.5	
独 語	ラインホルト・ホルスト・ハミッチュ	独	昭9～昭16	ドイツ・ベル・ソフィア
英語	レギナルド・スタット・フィルド・ミルワード	英	昭11～昭16	バチェラー・オブ・アーツ
英語	ジョン・オウエン・ガハレット	英	昭16～昭17	
独 語	マックス・フリードリヒ・グラインドル	独	昭17～昭18	
独 語	シェブラー	独	～大14.9	

八高の外国人教師一覧
(加藤詔士「外国人教師のみた名古屋大学」より)

図10 パネル「八高の外国人教師」

雄飛した卒業生たち



第1回卒業記念写真（第2部甲2組＝工科、1911年）

主な卒業生

栗田元次(1-乙・歴史学・最後の八高校長)	篠原卯吉(13理甲・電気工学・名古屋大学総長)	平岩外四(26文乙・東京電力社長)
※丹羽保次郎(3二甲・電気工学)	杉戸 清(13理甲・名古屋市長)	中尾佐助(28理甲・文化人類学)
※岡田 要(5文乙・動物学)	阿部知二(14文甲・作家)	三國一朗(31文甲・放送タレント)
※久松潜一(6-乙・日本文学)	☆大隅健一郎(15文乙・商法学)	盛田昭夫(32理甲・ソニー社長)
☆横田喜三郎(9-甲・国際法学)	☆竹内理三(17文甲・歴史学)	☆木村資生(35理甲・遺伝学)
※東畑精一(9二丙・農学)	本多秋五(19文乙・文芸評論家)	☆梅原 猛(36文乙・哲学)
山田盛太郎(10-甲・経済史学)	平野 謙(20文乙・文芸評論家)	森 政弘(37理乙・ロボット工学)
八木健三(10理甲・鉱物学)	藤枝静男(本名＝勝見次郎、20理乙・作家)	☆伊藤正男(39理・生理学)
☆正田建次郎(12理甲・数学)	古島敏雄(22理甲・農業経済学)	鈴木礼治(39理・愛知県知事)
☆坂本太郎(13文甲・歴史学)	豊田英二(23理甲・トヨタ自動車工業社長)	加藤延夫(40理・医学・名古屋大学総長)

☆は文化勲章受賞者、※は文化功労者。アラビア数字＝卒業回、漢数字＝一が文科、二が理科

八高の卒業生のほとんどが帝国大学に進学し、各分野の指導者、中心人物となりました。
上に挙げた30人以外にも、各界で活躍した人々が大勢います。



図 11 パネル「雄飛した卒業生たち」

寮生活—その1



瑞陵キャンパスの一角にあった学寮の全景（左から北寮、中寮、南寮）



学寮の部屋



同室の寮生（1935年）

寮内日課時限	
起床	午前六時
朝食	午前七時
昼食	午後五時
夕食	午後六時半迄
入浴	同三時半ヨリ同六時半迄
掃除	同三時半ヨリ同六時半迄
就寝	午後十一時三十分
消灯	午後十一時三十分
一、外出時限ハ朝食後ヨリ歸寮時間迄トス	
二、休業日ノ前日ハ歸寮時間ヲ午後十時三十分トシ點檢時限ヲ同十時三十分トス	
三、奉送迎ノ行軍、旅行、儀式等ノ日課アルカ爲メニ臨時ニ全日ノ授業ヲ休止スルモノ之ヲ休業日ト見做サス從ツテ特ニ掲示セサル限リ前ノ前日ノ點檢、歸寮時限、消灯後歸寮者ノ取扱方等總テ平日同様タルヘシ	
四、十一月十六日ヨリ三月三十一日迄起床午前六時三十分トス	

六一

寮内日課時限
（第八高等学校学寮文芸部
『瑞寮史』1926年より）

図12 パネル「寮生活—その1」

寮生活—その2



学寮の食堂



炊事部の学生と食堂の女性従業員

1920年に改訂された学寮規約には、寮生による「自治」がうたわれ、「炊事ハ学寮ノ自営トス」「在寮生ハ総テ本部ノ食事ヲトルベキモノトス」などの条文に基づいて炊事部が設けられていました。



車座になつてのすき焼き



図13 パネル「寮生活—その2」

寮歌「伊吹おろし」



伊吹風歌碑（名古屋市昭和区 鶴舞公園内）



八高生青春像

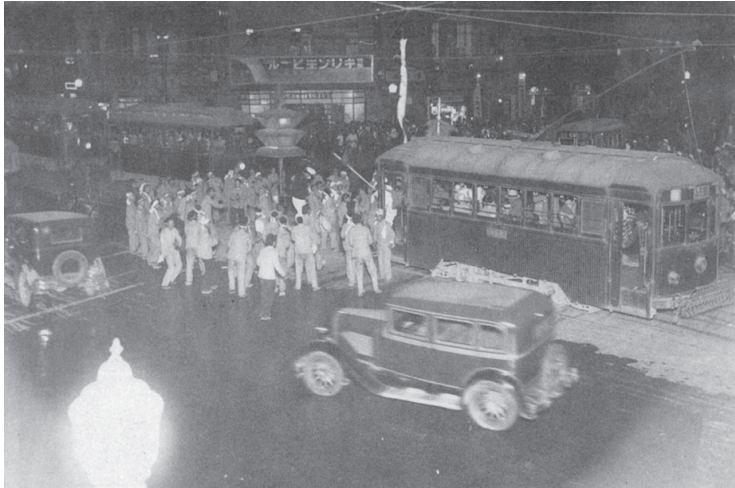
「伊吹風^{おろし}」歌碑は、1958年に八高創立50年を記念し、八高の同窓会である八高会が設置しました。設置場所に鶴舞公園が選ばれた理由は、旧市街地から八高へ行く途中にあって八高生が通学の際にここを通っていったからでした。伊吹風は、現在でも名古屋大学の学生の間で歌われています。

八高生青春像は、八高会が八高創立80年を記念し、1988年に名古屋市立大学（山の畑キャンパス）内の「剣ヶ森」（八高の校庭跡）に設置しました。ブロンズ像座台には、八高寮歌「光のどけき」の一節からとった題字「わが友若き旅人よ」が刻まれています。



図 14 パネル「寮歌『伊吹おろし』」

ストームとデカンショ



市電を止めたストーム（栄町交差点、1933年）

ストーム（storm）とは、学生が徒党を組み、蛮声とともに荒々しく寮の部屋に乱入して暴れまわる夜半の襲撃のことです。それが1928年からは市街地でもおこなわれるようになりました。

17. ス ト ー ム
ストーム眠だと寝ている奴は コリヤ コリヤ
蜜に蔵られて死ぬがよい
ヨーイ ヨーイ デカンショ
他の寮の奴等の安眠妨害どころではない、水や豪雨
をひっかけられて、疲れ切った足を伸べて嘔吐にや
ア夜が明ける。だがそこが八高生の可愛いところさ



（『八高生のぞ記』より）



5. デカンショ踊り

デカンショ デカンショで死ぬ迄踊れ コリヤコリヤ
俺が死んだら 子孫が踊る ヨーイ ヨーイ デカンショ
デカンショ 踊りを踊れば、山崎目ダンスだ。バット
一本とデカンショを知っていれば、御台場方にも踊れます
よ。嘘だと思ったら、お母さんの御留守に踊って御覧なさい。

（『八高生のぞ記』より）



全校デカンショ（1943年記念祭）

デカンショとは、デカンショ節を歌いながら踊り狂う、いわゆるデカンショ踊りのことです。デカンショの意味は諸説ありますが、「デカルト」「カント」「ショーペンハウエル」の略といわれ、旧制高校生などの間で広く歌われました。

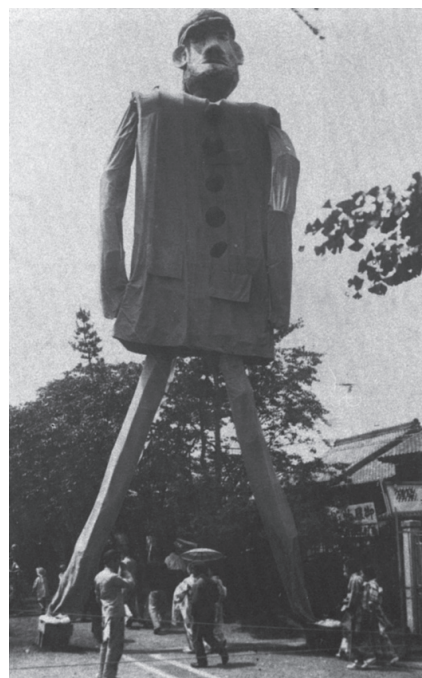


図 15 パネル「ストームとデカンショ」

記念祭(学園祭)



市民でにぎわう記念祭（1933年）



大八高生（1937年）
ナナちゃん人形の元祖？



「金求金苦（キングコング）」
（1934年）

1933年にアメリカで作られた映画
『キングコング』と、昭和恐慌による
不況をかけたものと思われます。

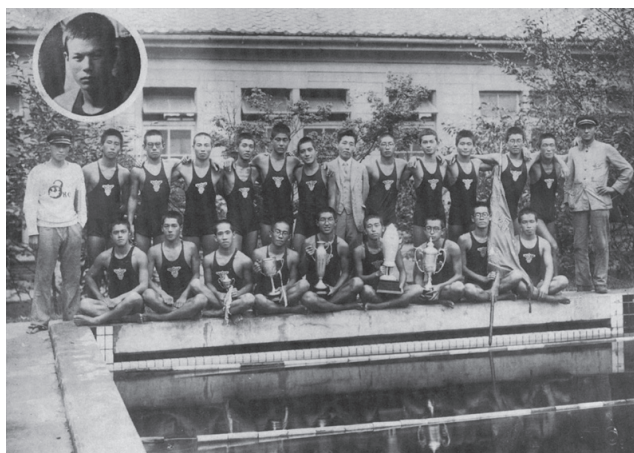


ヒトラー指揮、ムッソリーニ・スターリン・ルーズベルト共演による
『軍備無制限交響（惶恐）楽』（1935年）



図 16 パネル「記念祭（学園祭）」

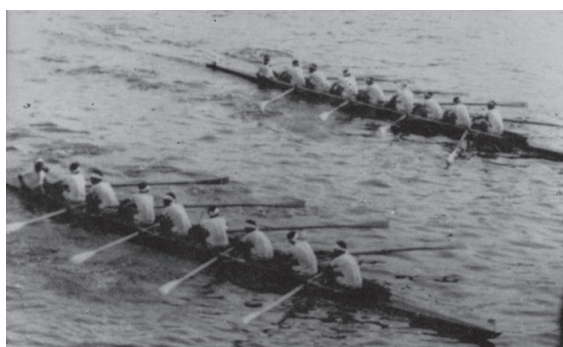
スポーツ八高



インターハイで優勝した水泳部（1934年）
この年から3連覇しました。



インターハイで優勝した陸上競技部の祝勝会（1935年）



第6回全国高校エイト決勝戦で一高を破ったボート部
（1935年、隅田川白鬚橋下500mの接戦を制す）



四高との野球戦の記念写真（1925年）



図17 パネル「スポーツ八高」

四高戦と応援団



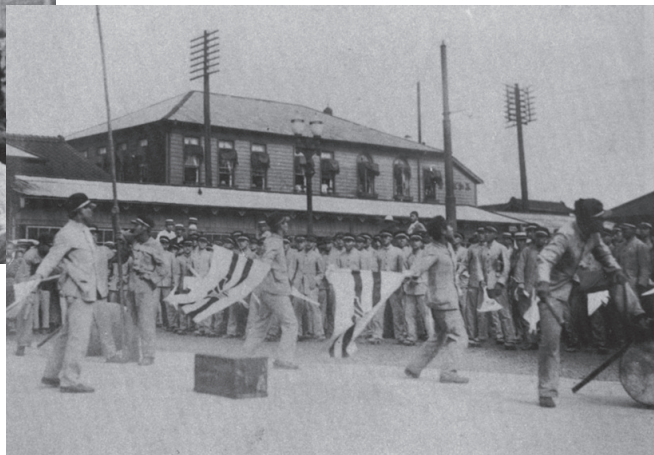
にらみあいながら握手
(1931年、名古屋駅前、右が八高)



名古屋駅前で握手をかわす八高と
四高（第四高等学校、金沢）の応援団（1935年）



金沢の街を行く八高応援団
(1930年頃)



寮歌・応援歌で「南下軍」（四高勢）を迎える応援団
(1931年、名古屋駅前)



図 18 パネル「四高戦と応援団」

八高生と政治



1932年の擬国会（講堂、記念祭にて）

八高生は政治にも高い関心を持っていました。1914年から始まった擬国会は、帝国議会を模した本格的なものでした。左翼運動に参加する学生もあり、八高当局にとって学生の思想問題は常に大きな課題とされていました。1930年には、多くの八高生が検挙され、厳しい処分を受けています。この時に除名処分を受けた八高生に、戦後の代表的な経済学者である都留重人がいました。



『新愛知』（中日新聞の前身）1930年2月16日



『帝国大学新聞』 1930年12月15日



図19 パネル「八高生と政治」

戦時下の学生群像—その1

15. 鍛 錬 調 査

(1) 所屬班ト一週總計時間トノ關係

時 間	0~5	6~10	11~15	16~20	21~25	不 明	計
劍 道	4 (12%)	13 (35%)	18 (53%)	—	—	6	40
柔 道	7 (20%)	7 (20%)	17 (54%)	2 (6%)	—	4	39
弓 道	3 (8%)	6 (16%)	24 (63%)	4 (10%)	1 (3%)	5	43
相 撲	2 (13%)	11 (69%)	3 (18%)	—	—	3	19
野 球	1 (5%)	3 (16%)	7 (37%)	4 (21%)	4 (21%)	4	23
庭球(硬)	—	—	—	—	6 (67%)	1	10
庭球(軟)	2 (6%)	20 (66%)	5 (16%)	4 (13%)	—	6	37
卓球(卓)	1 (5%)	14 (78%)	3 (17%)	—	—	—	18
蹴 球	1 (4%)	13 (52%)	10 (40%)	1 (4%)	—	1	26
籠 球	5 (17%)	14 (46%)	10 (34%)	1 (3%)	—	6	36
排 球	3 (8%)	19 (53%)	13 (36%)	1 (3%)	—	5	41
陸上競技	2 (7%)	5 (19%)	19 (70%)	1 (4%)	—	3	30
水 泳	—	8 (27%)	13 (45%)	6 (21%)	2 (7%)	5	34
漕 艇	—	4 (25%)	5 (31%)	3 (19%)	4 (25%)	4	20
體 操	15 (35%)	22 (51%)	6 (14%)	—	—	3	46
山 岳	6 (38%)	7 (44%)	1 (6%)	1 (6%)	1 (6%)	3	19
股 渉	35 (73%)	13 (27%)	—	—	—	10	58
後援部等	14 (33%)	27 (64%)	1 (3%)	—	—	12	54
射 撃	1 (4%)	18 (69%)	5 (19%)	2 (8%)	—	2	28
騎 道	7 (32%)	15 (68%)	—	—	—	8	30
航 空	6 (33%)	5 (28%)	6 (33%)	1 (6%)	—	8	26
軍事研究	4 (25%)	12 (75%)	—	—	—	2	18
計	119	255	169	33	18	101	695

20. 崇 拝 ス ル 人 物

	文 科			理 科			計	第3期	第4期	第1期
	I	II	III	I	II	III				
吉 田 松 陰	17	15	14	46	10	11	76	31	77	10
西 郷 隆 盛	20	9	7	36	12	12	8	32	63	17
野 口 英 世	3	2	3	8	15	12	10	37	45	6
植 木 正 成	12	4	3	19	7	7	3	17	36	5
ゲ ー テ	3	12	6	21	—	3	—	3	24	9
ヒ ト ラ ー	5	2	—	7	2	8	—	10	17	2
乃 木 希 典	4	1	2	7	4	2	—	6	13	—
ク リ ス ト	—	3	1	4	2	3	—	5	9	1
バ ス ツ ー ル	1	—	—	1	6	—	—	7	8	—
観 望 堂	2	1	1	4	—	2	—	2	6	—
豊 田 秀 吉	1	1	—	2	1	3	—	4	6	—
ナ シ ・ 無 選 入	29	40	36	105	66	81	43	190	295	398

第八高等学校報国団生活部集会所班『第4回生徒生活調査』（1941年）

1940年に校友会を改組した報国団では、運動部は「鍛錬部」の班となりました。崇拝する人物の調査では、吉田松陰が不動の1位であった西郷隆盛を初めて抜いたと解説されています。

十一月二十五日 〔木〕 晴
(前略)

国家存亡の重大時期に際し、国家の中にあるすべては一途に戦争目的完遂に向けられ個人は、伝統はすべてその一点に集中されなければならない。犠牲ではない皇国民として当然の義務であり、自己を殺し伝統を殺し皇国の中に永遠の生命を見出す、之即ち我等すめら御民の本然の姿である。皇国在りて我等有り。皇国なくして我等は有り得ない。国家の政策を樹立し、国民を動かすものは彼等〔至尊は申すも畏し。この文外に置かれたし〕であり経験あり知徳のすぐれた人であるかも知れない。而し国家を動かしかし国家の存亡を荷つて立つは実に我等青年である。吾等の若き血が、吾等大和民族の血が国運を決するのである。国家は吾等学徒に期する所実に大なり。我等今ぞ出陣の命を受けたのである。社会と交渉を絶つが如く見えた学園にも出陣の命は下り、学園にも時局の波は滔々と迫つてゐる。文科生は往く。あ、壮なる哉。学徒の本分たる勉学を中止して客観的に之を見れば誠に気の毒である。

而し彼等は既にこの事あるを知つてゐた。今やそれが現実となり、而して彼等は今や雄々しく往く。彼等は完全に現在の自己を見出したのだ。さればこそ彼等は笑つて往かんとしてゐるのだ。彼等こそ真に眞の日本人たる自己を見出し得たのだ。文科生は往く 文科生は往く 便所の中に“理科生ヨ 後ヲタノム”と託してあつた。彼の気持! 私はそれを涙なくして読み得なかつたのだ。我々理科生はこの事に関して余りにも無関心であるのではなからうか。

(後略)

クラス日誌（理科6組）の抜粋（1943年）

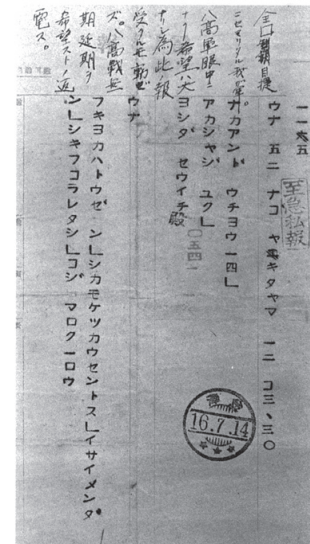


図 20 パネル「戦時下の学生群像—その1」

戦時下の学生群像—その2



報国団鍛錬部銃剣道班のアルバムの一ページ（1943年）



八高陸上競技部から四高へ
対抗戦決行を呼びかける電報
（1941年7月）

電報文面（八高）
「不許可は当然 しかも決行せんとす
委細面談 至急来られたし」
欄外メモ（四高）
「全国制覇目捷（捷）にせまりたる我が軍。
八高軍眼中になく希望は大なりし為此の報受くるも動ぜず。
八高戦無期延期を希望すとの返電す。」
実際には、同年10月に対抗戦がおこなわれました。



図 21 パネル「戦時下の学生群像—その2」

奪われる自由

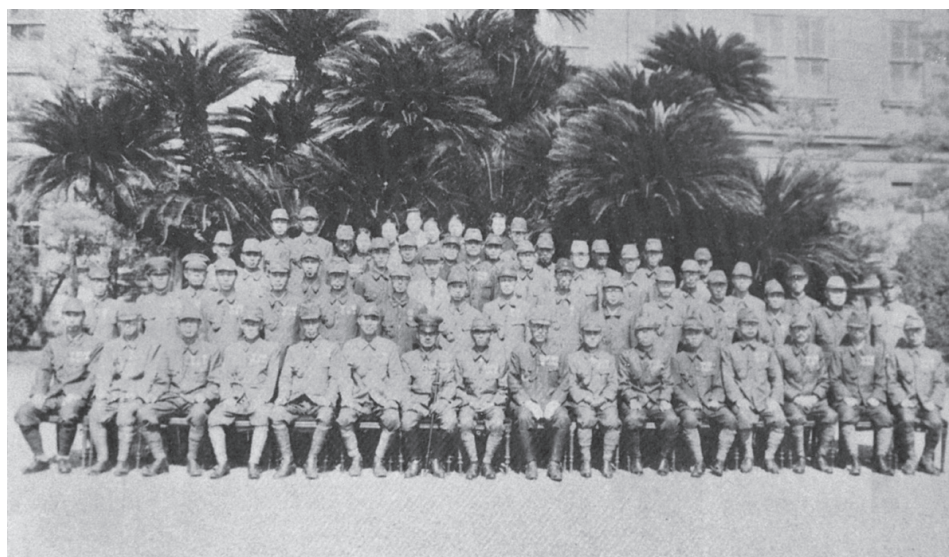


八高当局からの掲示（1944年）



工場に勤労働員される直前の俳句班。
足にはゲートルを巻いています。

登下校の際には必ず脚絆（ゲートル）を着用すること、禁煙、マントの着用禁止、制服・制帽着用時の敬礼は挙手礼とすること、などが指示されています。

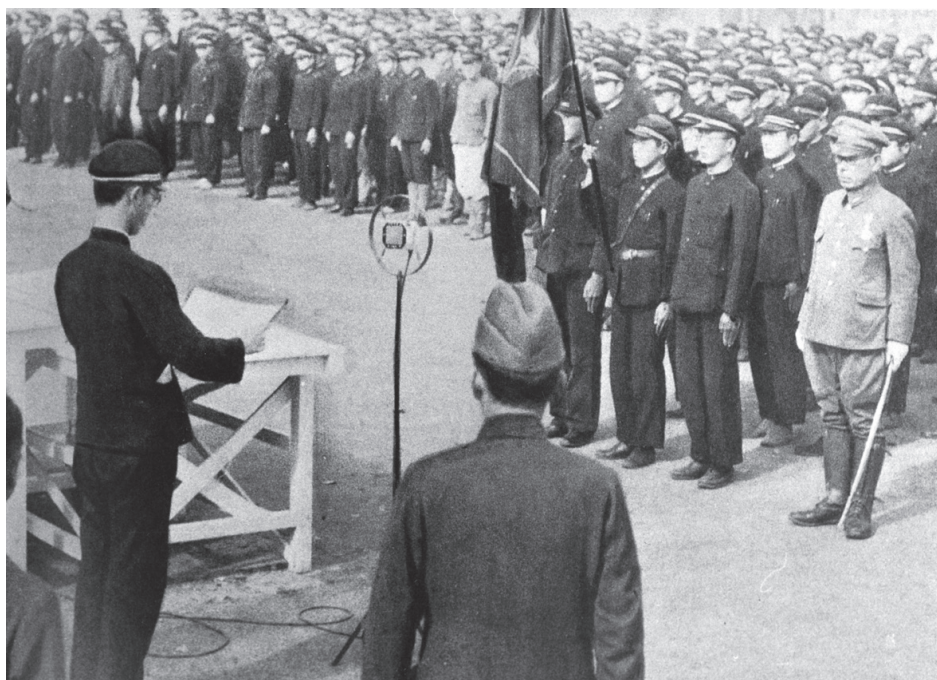


国民服・戦闘帽・ゲートル姿の全教員（1943年）



図 22 パネル「奪われる自由」

八高生の出陣



八高の出陣学徒壮行会（1943年）



旅順で入隊する八高生への寄せ書き入り日章旗（1944年）



八高内の表忠碑（左奥）
騎馬姿は伊藤仁吉校長（1943年）

1940年に、日中戦争で戦死した八高同窓生
18名を追悼・顕彰するために建立されました。

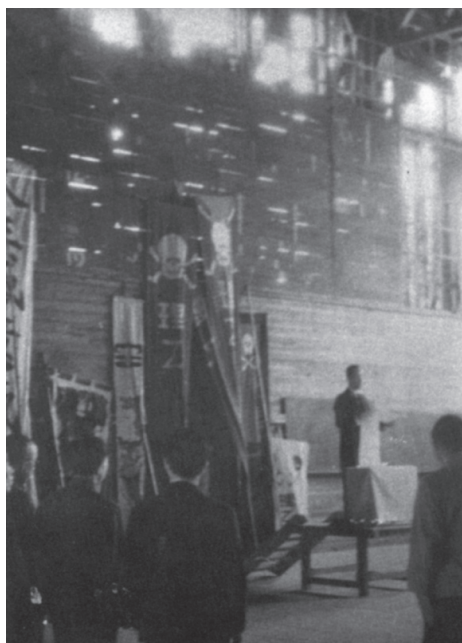


図 23 パネル「八高生の出陣」

焦土から復活する八高文化



復活した街頭ストーム（1946年）。右上にこれを監視する占領軍のジープが見えます。



焼け残った体育館で記念祭の
式辞を述べる教員（1946年）



「日本的民主主義」（戦後の記念祭）



「男女同権」（戦後の記念祭）



図 24 パネル「焦土から復活する八高文化」

郁達夫と八高一中国人文学者の青春



郁 達夫 (ゆ・だっふ)

郁 達夫(Yu Du-fu)は、魯迅・郭沫若らと並ぶ中国近代文学の代表的な作家です。郁の処女作『沈淪』(1921年)は、彼の八高時代を描いた自伝的小説です。



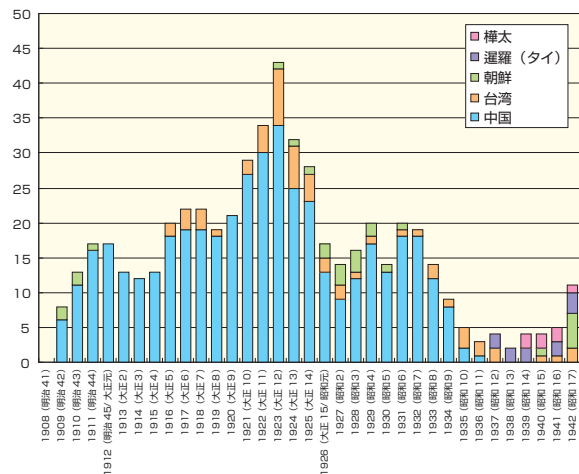
郁達夫文学碑 (名大豊田講堂)

八高創立90年を記念して、1998年に八高会が設置しました。2007年に現在の位置に移されています。



◆ 郁 達夫 略年表

- 1896 年 (1 歳) : 清国 (中国) 浙江省富陽縣の士大夫の三男として生まれる。
- 1913 年 (18 歳) : 中華民國政府から日本視察に派遣された長兄に伴われて来日。
- 1914 年 (19 歳) : 第一高等学校 (特設予科) に入学。
- 1915 年 (20 歳) : 第八高等学校に入学。翌年、三部 (医科) から一部 (文科) 丙類に転科。西洋・日本の小説を耽読し、校友会雑誌や新聞『新愛知』に漢詩を投稿。
- 1919 年 (24 歳) : 八高を卒業し、東京帝国大学経済学部に入學。佐藤春夫、井伏鱒二らと交流するようになり、小説の執筆を始める。
- 1921 年 (26 歳) : 郭沫若ら中国人留学生と文学団体「創造社」を創設。上海の書店から、短編小説集『沈淪』を出版。
- 1922 年 (27 歳) : 東京帝国大学経済学部を卒業。中国に帰国し、教員、雑誌の編集をしながら創作活動続ける。
- 1923 年 (28 歳) : 北京大学で統計学などを教える。同大学の講師を兼任していた魯迅と交際するようになる (のち武昌大学、広東大学教授)
- 1936 年 (41 歳) : 福建省政府主席に誘われて省政府参議に就任。14 年ぶりに日本を訪れ、佐藤春夫、横光利一、林芙美子、志賀直哉ら多くの文学者と懇談。
- 1938 年 (43 歳) : 国民政府軍事委員会政治部第三庁設計委員となり、抗日宣伝活動、前線各地の視察慰問に従事。
- 1939 年 (44 歳) : シンガポールの中国語新聞『星洲日報』の編集に携わり、一時社説を担当。
- 1941 年 (46 歳) : シンガポール華僑の文化界戦時工作団主席に選ばれる。
- 1942 年 (47 歳) : 日本のシンガポール占領を避けてスマトラ島に潜伏、身元を隠して日本軍憲兵隊の通訳などとして使役される。
- 1945 年 (50 歳) : 日本の降伏後、日本軍憲兵隊に拉致され、9 月に絞殺される。



八高に在学した留学生数

※朝鮮、台湾、樺太は日本の植民地であったが、留学生として計上。
 ※また1933・34年の中国は、「満州国」を合わせた数。

図 25 パネル「郁達夫と八高一中国人文学者の青春」

実物展示

(1) 時鐘：名古屋市博物館所蔵、創立期から八高にあり、学生や教員に始業や終業の時刻を知らせました。1945（昭和 20）年の空襲で損傷したため、若干の補修がされています。[八高内の鉄塔につり下げられた時鐘の写真は省略]

(2) 名古屋市博物館所蔵資料—その 1（図 26 上）

- ・校印：左から「第八高等学校印」、「第八高等学校」、「第八高等学校長」で、卒業証書などに捺されました。
- ・「第八高等学校入学志望者心得」（明治末期～大正初期）
- ・入学許可通知書（1926 年）
- ・卒業証書（1929 年）
- ・数学のノート（1925～26 年）：この講義を行った椎尾 詞（しいお ひとし）教授は、「八高数学」の伝統を築いた教育者で、ローマ字を普及することにも熱心でした。すべてローマ字で板書したと言われていますが、それはこのノートからも明らかです。

(3) 名古屋市博物館所蔵資料—その 2（図 26 下）

- ・八高陸上競技班から四高への挑戦状（1942 年）：八高の運動部は、金沢の第四高等学校（四高）と毎年定期戦をおこなっていました。1940（昭和 15）年に校友会が報国団に改組されたのにもない、陸上競技「部」が陸上競技「班」となっています。



図 26 名古屋市博物館所蔵品

- ・ 応援団会計委員の財布（1926 年）：1922 年に選手制度が認められ、他校との対抗戦ができるようになったことにともない、応援団も結成されました。写真〔省略〕はこの財布の裏側にある持ち主の署名です。
- ・ 創立 27 周年記念祭で作られた絵はがき（1935 年）：八高生の姿がコミカルに描かれています。

（４）八高生のマント（名古屋市博物館所蔵品）（図 27、28）

〔学生帽、学生服、高下駄とともにマネキン人形に着せて展示〕

旧制高校生のオシャレ感覚：弊衣破帽とはいいいながら、服装には強いこだわりをもっていました。たとえば、制帽に「あごひも」はありません。軍隊や警察ではないからです。また、制服の胸ボタンは、金ピカを嫌い、黒色（木製かエボナイト製？）にしました。

八高生は、左襟に L（文科）か S（理科）の襟章をつけ、寮生はさらに右襟に寮のマークをつけました。（マント以外は複製品ないし模造品です）

（５）展示ケース 1 〔写真省略〕

- ・ 『第八高等学校一覧』：八高が毎年刊行していました。多くの基本事項やデータが掲載されています。
- ・ 開校記念の絵はがき：これ以後、開校何周年など、機会あるごとに多くの絵はがきが作られました。
- ・ 行幸記念の絵はがき：1927（昭和 2）年に昭和天皇が八高を訪れた記念に作られたものです。
- ・ 八高復興落成記念のバックル（1947 年）



図 27 八高生のマント



図 28 パネル「八高生が使っていたマント」

戦でしのぎをけずりました。このメダルは、1935（昭和 10）年に名古屋でおこなわれた対抗戦を記念したものです。八高と四高の校章が並んでいます。

- ・ 在寮記念のバックル（1935 年）
- ・ 第 10 回全国高等学校陸上競技大会（インターハイ）の記念メダル（1935 年）

（８）展示ケース４〔写真省略、八高寮歌「伊吹おろし」の歌唱 CD をバックに流した〕

八高の寮歌集：八高の寮歌は「伊吹おろし」だけではなく、毎年のように新しい曲が選定されていました。

- ・ 寮歌「伊吹おろし」の歌詞：作詞者中山 久氏の自筆
- ・ 学寮文芸部『八高寮歌集』（1926 年）
- ・ 八高学寮文芸部『八高寮歌集』（1932 年）
- ・ 第八高等学校学寮『第八高等学校寮歌集』（1933 年）
- ・ 第八高等学校『寮歌集』（1948 年）

（９）展示ケース５（図 30）

- ・ 『校友会雑誌』（第八高等学校校友会）：論文、エッセイ、小説、詩歌、部活動の報告などで構成されています。
- ・ 『同窓会雑誌』（第八高等学校同窓会）：第 4 号は、1935 年に死去した初代校長大島義脩の追悼号になっています。
- ・ 『瑞稜』（第八高等学校学寮文芸部）：八高生によるさまざまな文芸作品のほか、学寮の動向も知ることができます。
- ・ 八高短歌会の歌集：『桑の葉』（1926 年）、『梅の木』（1927 年）、『若櫨』（1931 年）
- ・ 八高俳句会の句集『草莓』（1936 年）

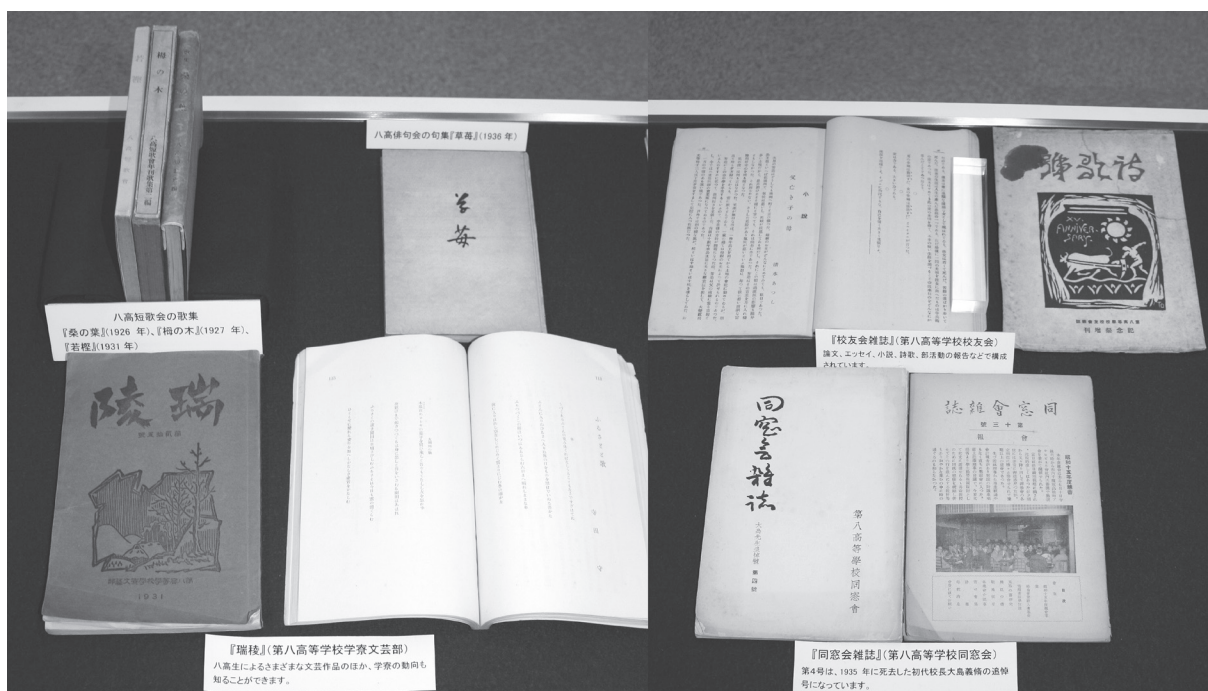


図 30 展示ケース 5

(10) 展示ケース 6 (図 31)

- ・ 報国団統剣道班（元剣道部）の班記：左ページに敗戦直後の以下のような記述があります。「十五日は遂に民族の大試練の御宣告の日となったのだ。涙数行所の騒ぎでない。今日当りは少し落着いた。大日本民族の大班生活は開始されたのだ。何だか気狂の様なことを二日許り書いた。更に続いたのが之だ。大勇気を起して進軍！！唯之あるのみ。短気は勇に似て勇に非ず卑却なり。徒らな狭客根性では再建出来ぬぞ。」
- ・ 第八高等学校報国団生活部集会所班調査『第四回 生徒生活調査 昭和拾六年九月現在』：八高の出身地は、朝鮮や満州国を含む広範囲におよぶものの、東海三県と静岡県に集中し、とりわけ愛知県が全体 4 割以上を占めています。
- ・ 第八高等学校報国団『瑞穂』第 1 ～ 3 号（1941 ～ 44 年）：校友会は『校友会雑誌』を刊行していましたが、1940 年に政府の命令により校友会が報国団になると、機関誌も改称され、号数も改められました。
- ・ 第八高等学校『生徒必携』（1942 年）：冒頭に「教育勅語」、「青少年学徒に賜りたる勅語」、「大東亜戦争宣戦の詔書」が掲載されています。
- ・ 第八高等学校学寮『昭和十七年度 寮生手帳』（1942 年）：学生による自治がうたわれていた「学寮規約」は 1942 年に廃止され、「学寮規程」が定められました。校長が寮の責任者となり、全教官が泊まりこみで生活指導にあたるようになりました。
- ・ 理科六組「クラス日誌」（1943 ～ 44 年）：左上のパネルに、抜粋を活字にしたものが掲載されていますのでご覧ください。
- ・ 八高排球会『会報第 11 号』（1943 年）：戦死した 2 名の排球会（バレーボール部）OB にむけた追悼号。

映像コーナー

- ・ 思い出の写真でたどる八高の歴史：パネルで紹介していない写真も含まれます（約 85 コマ、13 分間ほど）。

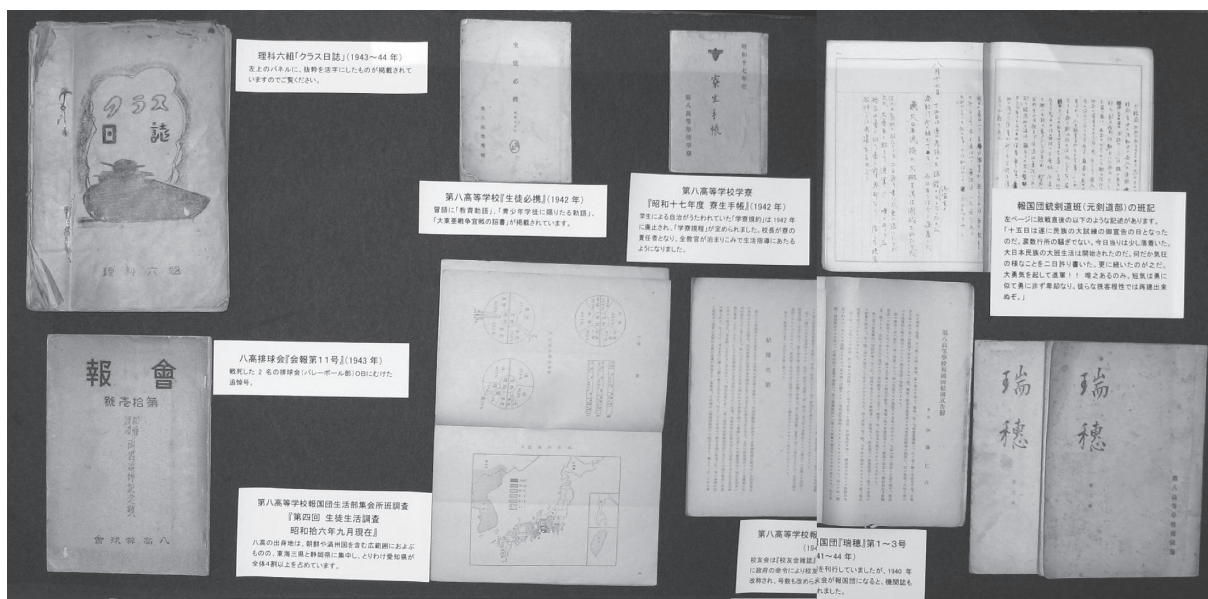
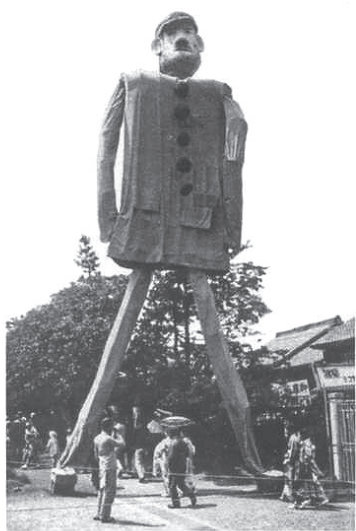


図 31 展示ケース 6

NUM 第15回名古屋大学博物館企画展

伊吹おろしの若者たち

—八高創立百年の歴史から—



2008年

10月7日[火]～11月8日[土]

場 所: 名古屋大学博物館

開館時間: 午前10時～午後4時 入館は午後3時30分まで

休 館 日: 日曜日・月曜日

入場無料

地下鉄名城線「名古屋大学」駅下車 2番出口を出てすぐ
(駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用ください。)

お問い合わせ

名古屋大学博物館

Tel: 052-789-5767 Fax: 052-789-5896

URL: <http://www.num.nagoya-u.ac.jp/>

主催: 名古屋大学博物館、名古屋大学大学文書資料室

特別講演会

日 時: 10月29日[水] 午後1時30分から

場 所: 博物館 3階講義室

山口拓史(名古屋大学大学文書資料室 助教)

「寸描 — 第八高等学校」

2009年、名古屋大学は
創立70周年(創設138周年)を迎えます

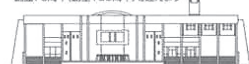


図 32 ポスター

- ・ 郁 達夫が残したもの（約 10 分間）：NHK制作の作品と CBC テレビニュースの、それぞれ一部です。

関連講演会

- ・ 第 91 回名古屋大学博物館特別講演会
「寸描―第八高等学校」
講師：山口拓史（名古屋大学大学文書資料室 助教）
日時：10 月 29 日（水）午後 1 時 30 分から 3 時

本講演の内容は、『名古屋大学大学文書資料室紀要』（第 17 号、2009 年 3 月刊）に掲載予定。

（2008 年 11 月 20 日受付）